

＜文献紹介＞

中野収 著

(1992, 有斐閣, 四六判, 280頁, 1700円)

『「家族する」家族—父親不在の時代というけれど…—』

大 和 礼 子

現在進行中の家族現象をリアリティをもって記述・分析することは非常に難しい。本書は「さまざまな家族像を、現にあるものとしてそれ自体描いてみる」という立場からの、その試みである。

著者が身近で、あるいはテレビドラマ等で見聞きして、リアリティを感じる現代家族の像がある。それは「多かれ少なかれ家族の形成・維持の意思があり、いくばくかの鬱屈、諦めを含み、演技と欺瞞でやりくりをしながら、家族らしきかたちを維持している」というものである。各々の家族は多様であるが、どの家族にも「正常」からはずれているという「不幸福感」がない。「正常」が相対化されている。

著者はこのような家族を、主に三つの枠組を用いて、以下のように分析している。第一は、かつて家族という共同体をまとめる力として働いていた規範的な規制力が、現在著しく低下していること。父親不在も価値・規範としての父が否定されたことの現れと見ることができる。第二は、その結果、家族を維持していく力として近代的な愛情・性的執着・血縁が残る。ところが前二者は移り易いものなので、歴史普遍的な血縁、特に母子関係が優越しがちである（この点は家族史の知見から異論があろう…評者注）。この状況下、父親をも含む家族を凝集力あるものとするために、すべての家族員が、家族のいい関係を作ることにたえず気を使い演技し、相互にそれを確認しあっている、すなわち「家族」している。この原動力は、家族を作り維持していこうとする「家族願望」である。第三は、今日、個人主義に由来する「家族を忌避する気持ち」と「家族願望」という相反する力が人々に作用し、家族をめぐる状況を形作っている。あらゆる家族形態（未婚の母、ディンクス、養子、非血縁者の共同生活等）がこの対立する願望に「おりあい」をつけようとした結果である。いずれの形態もこのような状況に対する合理的反応なので、価値の優劣はつけられない。

以上のように、家族の多様化といわれる状況が手際よく分析されている。本書から評者は、近代の家族はいつも誰かが「家族する」ことで成立してきたのではないか、という示唆を受けた。というのも「家族のまとまりのために気を使う母」というのは近代において見慣れた光景だからである。とすればすべての家族員が「家族する」という本書の分析を、「家族する」ことのひとつのタイプとして位置づけることも可能ではないか。そして、このタイプがどのような社会層で生じているのか、このタイプを生じさせた社会的条件は何かといったことが、今後明らかにされねばならないだろう。

(やまと れいこ・関西大学)